

嶋の里なれば、蟹のとき屋も程近し。名は鵜嶋と聞きぬれど、いとわびしき村つゞき、はや濱道に出でにけり。所まだらに薄雪の、消行くよりもつたなきは、有爲轉變の世の中と、猶も無常をさとりけり。かく替り行く世の中を、常とおもふぞ迷ひなる。波音高く風あらく、憂を身につむ湊なる、渡しの船に乗らんとて、左門取あへず。

これや此のの岸ならん渡し守

しでの山路の道しるべせよ

かやうに口ずさみ、やがて船よりおりて、暫く四方をば眺望し、實に山々の奥に積る眞白の雪ぞ、皆興ありと見ゆれども、やがて日影に消ゆる。是とても人間無常のためし也。左右の村々秋のかりほの仕廻ひつゝ、冬籠りせし粧ひは、顔淵がたのしみもさこそと思ひつゝ、頓て松任にも着きぬれば、乗物より下り、家來下々に至るまで、食事懇にいとなませ、野々市村も打過ぎて、東を遙に詠めやり、野田の松山見えぬれば、是ぞ當所の高野山、浮世のやみをあきらかに、楽しみ極めはかりなき、命の佛住み給ふと心の内に觀念し、はや金澤に参着し、先づ岡嶋備中が宅へ立寄りけれ

ば、種々の變にて日暮に及び、淺野川材木町の商人方に一宿す。元より約束の事なれば、脇田善左衛門尋ね来て物語あり。追付き装束改め、寶圓寺へ同道也。寶圓寺には中庭に疊を敷き、四方に垣を結ひ廻し、幕打ちて待ち居たり。左門は善左衛門を伴ひ、客殿に上り、手水鉢に指向ひ、うがひ手水心靜に物しつゝ、佛前を急度見上げ、尊嚴の牌前に長りて、閑に回向也。火鉢に立寄り手をあたゝめ、善左衛門と一つ二つ挨拶して、老中初め人持、物頭の歴々参詣して、客殿に詰居ければ、する／＼と立寄り、その程に隨ひ會釋しける躰たらく、げにも／＼利常卿の御取立、御懇に被遊けるも理りなりと感ぜぬ者はなかりけり。夫より幕の内に入り、指料の備前長光を、形見なりとて河口八郎兵衛に出さるゝ。其後盃をさしかはし、左門申しけるは、かやうに期を延ばして御供するを、臆したりと思ふ者有るべし。左あれば切腹の躰も悪口すべし。其の幕打上げて門前まで見ゆるやうに裁許せよと、矢田次左衛門に云ひければ、畏候とて望の如くにぞしたりける。其の時左門付髪いつくしくゆひなし、白小袖に上下着し、西に向ひ三方の脇

差取つて押戴き、弓手の脇にがばと突立て、聲を懸けて引廻しければ、川口八郎兵衛太刀を振上げ、終に夢想の鬼劍となす。満座の面々皆々袖をぬらしけり。別けて與力共、家來共、常々の情を語り、聲を許りに歎きけり。頓て寶圓寺にて葬送し、齒骨をば小松國松寺へ移しつゝ、御靈骨の近邊に納めけると云々。三州志に云ふ。品川左門雅直三千石、主殿祖也。萬治元年十二月四日於金澤寶圓寺自盡、介錯川口八郎兵衛也。

○高垣砦址

加邦録に云ふ。本源寺尾山にありし頃は、宗徒の一揆大將共所々に要害を構へて、尾山を守護す。樋口何某と云ふ者は、高垣に居す。左近將監と云ふ者は椿原に居し、或は石那坂等、右の所々に搦上を構へて蟠居し、土民を隨從して、我意を振舞ふと云々。三州志故墟考に、高垣墟は石川郡金浦郷に在り。今の品川主殿第地也と云ふ。とあり。或は云ふ。横山氏の舊士に樋口次郎右衛門といふあり。又田井村の百姓に樋口氏の者あり。是等彼の子孫ならんか。

○田井新町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、田井新町とあり。按ずるに、改作書舊記に載せたる、寛文五年四月田井村百姓等連署願書に、地子におろし家を造らせ申分、并御用地に被召上御替地共、今程家數多罷成、諸事縮之儀百姓共難成。諸事縮之儀は町方より裁許仕様に被成可被下云々。とありて、同年の覺書に、金澤廻り百姓地相對下し、定小物成御印帳之内、拾五匁紺屋役、田井村百新姓右衛門、拾五匁紺屋役、同村百姓地又四郎。右之御役銀百姓地相對下し之處、當年町方に付渡り、地子肝煎之裁許分に罷成。とあり。田井村百姓地相對下し地子地といふもの、則此の田井新町などの地なるべし。此の町地明治四年戸籍編成町名改正の時、田町新道と改稱し、同十二年郡地の々所、金澤市中へ合併の時、町地に屬せられたり。

○土川除

改作所舊記に、享保六年七月廿二日石川郡田井村領土川除之上地藏之前に喧嘩有之云々。と見え、上野村惣右衛門注進書に、

石川郡田井村領、河原三味に若黨躰之者兩人喧嘩仕候様子